風の末裔シリーズ・5th シーズンの4

# ～六連星・Ⅳ（むつらほし）～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

〜鼓動〜

懐かしい草木(そうもく)の香り満つる高原地帯の空気を、ユゥジーンは胸一杯に吸い込んだ。
「ん――…、地上に緑が増えると、帰って来たって気がするぅ」
「はは、そうかい?」
隣で青毛を駆るのは、西風のシド。砂漠一の飛び手だ。
西風の里の夏の祭祀は派手ではないが、丁寧な美しい祭りだった。病のモエギに変わって、ルウシェルが立派に長の代理を務め上げていた。
荘厳な民族衣装に身を包んで古い神言を唱えるルウは、何だか別人みたいで、それが見られただけでも、西風の滞在を認めてくれたナーガに、感謝感謝のユゥジーンだった。
「あっ…!」
前を飛んでいたシドが声を上げた。
「ユゥジーン、ほら!」
彼の示す視線を辿ると、夏草波打つ草原に、精悍に日焼けした二人の少年が手を振っていた。
「ヤン! フウヤ!!」
「えっ? じゃあ、こっちへ戻って来たのはシドだけなの? ソラは西風に残ったの?」
満面の笑顔をこぼして肩を叩き合った後、ソラのいない理由を聞いたヤンが、驚きの声を上げた。
「ナーガ様に西風の里が襲われた事を手紙で伝えたら、戻らなくてもいいって返事が来たんだけれどね。ルウ様は、こんな時こそ、蒼の里の補佐を出来なくてはって」
「わあ、ルウらしいね」
フウヤが何だか嬉しそうに言った。
「二人で話し合って、どちらか残る事にしたんだ。僕は当然ソラに残って貰うつもりだったんだけれど」
「ソラってそういう所、意地張っちゃうでしょ」
ヤンも何だか嬉しそうにチャチャを入れる。
「うん、まさに、そう」
「ルウもでしょ」
「そうそう、二人して変に意地張って、何故だか僕が残る事に決まっちゃいそうだったから…」
「どうしたの?」
「仕方ないからベタな嘘付いた」
「へぇ?」
「実は蒼の里で狙ってる娘(コ)がいるって」
「うひゃあ、ベッタベタだね」

「そしたら二人に両方から肩を叩かれて、『頑張れ！』って」
「あははは」
「あははは」
「そんな二人の間に割って入る程野暮じゃございません」
「あははは」
　四人は木陰で腰掛けて、砂漠の冒険談や西風の祭祀の話なんかをした。

「ねえ、そんなに長くは飛べないけれど、ちょっとの距離なら、君達を風に乗せて飛ばせてあげられるよ」
　シドが再び発つ準備をしながら言った。ちょっとと言っても、多分二人が地上を歩く二、三日分だ。
「有難う、でもいいよ」
　二人は相談もなしに即答した。
「せっかくここまで歩いたんだもの」
「うん、最後まで歩き通したいんだ。歩き通せばルウとの距離が遠くじゃなくなる気がする」
「そうか、うん、そうだな！」
「ちょっと残念。暫くまた会えないね」
　ユゥジーンとシドが上昇しかけた時、フウヤが思い出したように叫んだ。
「あ、そうだ、ユゥジーン！」
「んー？」
「次会った時、二刀流教えて！　めっちゃカッコよかった！」
「はは…、ああ、いいよ。利き腕側の足から踏み出す訓練しとくんだ」
「うん、分かった。やっとくから！　絶対だよ！」
「ああ、約束だ」
　朗らかに手を振る地上の二人は小さくなり、シドとユゥジーンは水平飛行に移った。
　きっとまた会えるさ。今の灰色の災厄の問題が片付いたら、休みを貰って三峰に訪ねて行こう。ヤンとフウヤの家に泊めてくれるかな？　そんな事を考えながら、ユゥジーンは手綱を握り直して里へ馬を向けた。
　二人の飛び去った空の、遠くの山に黒い雨雲が掛かっていた。雨雲の中の空間が微かに歪んでいた。

＊＊＊

「でえぇぇい!!」
　全身の雨粒を飛ばして、水色の妖精の手から放たれた緑の槍が、灰色の渦の中心に飛び込んだ。渦の向こうで両手を掲げたシンリィと、印を結ぶリリが見える。
　リリは最近、シンリィを助ける呪文が板に着いて来た。お陰

でシンリィは力を使いきってぶっ倒れる事が少なくなった。
渦は中心から反転し、小さくなって消えて行った。
「ふいぃ〜」
カワセミは脱力して、雨に打たれるまま座り込んだ。一つ向こうの山でも翡翠色の光が広がり、そこに鎮座していた渦巻きが消えて行く。暫くしてそちらから、闘牙の馬が飛んで来た。
「カワセミ、大丈夫ですか？」
「うん…、大長、タフだね」
「年の功ですからね、手の抜き所に慣れているのですよ」
カワセミは辛そうに額に脂汗を浮かべている。連日の歪みとの闘いで、身体がボロボロなのだ。

根城にしている風穴に戻り、火を起こして衣服を乾かした。丸まってうずくまるカワセミの額に、大長が掌を当てている。
「ごめん、大長…、世話ばっかりかけちゃって…」
「今更何言ってるんです」
「元はと言えば、ボクのせいなのに」
「カワセミ！　そういう風に考えちゃ駄目って言ったでしょう。今度言ったらツネリますからね！」
「……」
ぽわん、と音がして、目の前に小さな波紋が現れた。

波紋の輪っかをくぐって紫のピンピン頭が出現し、リリがぽんと飛び出した。最近あちら側から穴を開ける術をマスターして、一人でちょくちょく来るようになった。
「この辺のウズマキはさっきので終いみたいだよ。じじさま、かーたん」
「そうですか、リリもよく頑張りましたね」
「その『かーたん』は止めてくれって何回も言ってるだろ！」
「あれぇ、かーたん、またヘタってんのぉ？　やあい、ヘタレ！ヘタレェ！」
「黙れ！　この爆発アタマ！」
「なによぉ、気にしてるのにぃ！」
「リリ、ヘタッてるヒトに追い討ちをかける子の所には、ズンドコベロンチョが来ますよ」
「それはイヤだぁ!!」
世界を揺るがす災厄と闘っているのに、ズンドコベロンチョの何が怖いんだろか？
「二人してヘタレヘタレって…」
こめかみを押さえて具合悪そうに丸まるカワセミの頭に、リリが撫で撫でするように手を置いた。
「シンリィもね、こんな感じなの。今、寝ちゃった」
「…そうですか…」

最初は小さく、出現も稀(まれ)だった渦巻きが、西風の一件以来、急に数が増えた。大きさも桁違いに膨らんで、消滅させるにも大変な力を要するようになった。

「ね、じじさま、あたしにも破邪の呪文を教えてよ。いつまでもシンリィのお手伝いじゃなくってさぁ」

「リリ、例え使えても、身体の追い付かない術は教えられないですよ」

大長はちょっとカワセミを見て言った。カワセミは目を閉じてうずくまっている。

「でもぉ…」

「リリ、貴方は貴方の役割をしっかりこなして下さいね。シンリィを助けられるのは貴方しかいないんですから」

「うん……」

雨音に挟まって、軽い寝息が聞こえて来た。

「かわせみさん、寝ちゃったね」

「あれ？　かーたんじゃないんですか？」

「かーたんって呼んだら、かわせみさん、元気になるでしょ？」

## ～風紋～

焼けた砂が描く風紋が地平まで続く。

オレンジの砂丘に、オレンジの瞳の娘が立っていた。手には麻の表紙の古びた書物。読み返しては暗記した砂漠の詩歌を唱えている。何度も何度も。

「ルウ様」

砂丘を越えて、パロミノに乗ったソラが現れた。

「朝からここに居られたのですか？」

「ああ…」

我に返った感じで振り向いた。肌や唇が乾燥しきっている。

「干からびてしまいますよ」

ルウシェルはソラの差し出した水瓶を受け取って、喉を鳴らして水を飲んだ。

「詩、すっかり覚えてしまいましたね」

「暗記したけだ。こういうの、私には向かないのかも…」

確かにモエギはこの書物を切っ掛けに風を流す能力を開花させたが、ルウにもその方法が合うとは限らない。

ユゥジーン達が北へ帰ったのが一昨日。

久し振りのトモダチに元気付けられたが、相変わらず風を流す感覚すら掴めない自分に、だんだん焦って来た。皆はそれぞれ立派に成長していたというのに…。

「ルウ様にはルウ様のやり方がきっとありますよ」

「そんな悠長にしていられないんだ。一日も早く母者の肩の荷を下ろしてあげたいのに！」
いつも同じ事しか言わないソラに、ルウはイライラしていた。
「それに『ルウ様』って呼ぶの、やめろって言ってるのに！」
「……すみません…」
「いちいち謝るのもやめろ！」
ソラに八つ当たりするなんてお門違いなのに、それが自分で分かっているから余計に情けなくなった。二人きりになるとこんなんばっかだ。だから、シドに残って欲しかったのに…。
ソラは静かに受け流して、話を変えた。
「僕はこれから出立します。帰りは四、五日後になると思いますが」
「あ、ああ…」
灰色の歪みについて、砂漠の他の部族と連携を取り合わなくてはならない。特に好戦的な南の跳び蜥蜴の部族の所は、一番に行っておくべきだろう。
ソラは西風の外交官だ。歴史だけは古いが勢力の廃れた西風の里が、他部族に侮られないのは、武力に長けた砂の民と繋がりがあるのと、あと、ソラの働きが大きい。話術もさる事ながら、ソラはヒトを惹き付ける何かを持っていた。
「気を付けてな」
「はい、モエギ様をお頼みします」
去り行くソラのパロミノを見ながら、ルウシェルはまた情けない気持ちになった。長の代理としても、一人じゃ何も出来ない自分…。
「お師さん……」
昔は、迷ったら、お師さんが導いてくれた。婚礼の時、近くまで来ていたらしいのに、顔も見せてくれなかった。
「今の私を見て、愛想を尽かしたのかもな」
子供の頃はあんなに気軽に会えたのに。お師さん、大人になるって難しいよ…。

夜になった。
星空の詩歌を試してみようと暗くなるのを待ったのだが、相変わらずどう唱えても感触を得られなかった。母者が唱えると、空と雲が生きているように動き出すのに。
「里へ戻るか…」
今日は帰ってもソラはいない。気が重かった。
夏の祭祀が終わると、西風の里は暗い雰囲気に沈んでしまった。長のモエギは臥せったきりだし、謎の渦巻きの正体も分からず、またいつ襲われるやもしれない。その不安な空気が、ルウの両肩にずっしりのし掛かっていた。

不意に、シンとした狭間に、何か聞こえた。
砂漠の夜に違和感のある、細くて高い子供の声。砂丘の反対側からだ。ルウは砂の原を回って、声のする方を覗いた。
「…!!」
声の主はやはり子供だった。
小さな女の子。紫の髪はこの辺にはいない種族だ。
その子が星灯りの下、体重がないみたいに、風紋の頂点をポンポン跳び移りながら、歌を唄っているのだ。
……??　覚えがある?　と思ったら、さっきまでルウが唱えていた詩だった。
「あっ?」
女の子はルウを見て、唄を止めた。
「この詩を知っているのか?」
ルウがそっと聞いた。
「ううん、今、あんたが暗誦してるの聞いてて、気に入っちゃったの」
女の子はまたポンポン跳んだ。
「ステキな詩。でも音楽を付けたら、もっとステキになるわ。そう思わない?」
「そうだな」
ルウシェルは苦笑いした。子供が何にでも節を付けたがるのは、よくある事だ。
「お前、どこの子供だ?　一人で砂漠に来たんじゃないだろ。迷子か?」
「ん、んん〜」
女の子はそれには答えず、後ろ手を組んでルウに近付き、手の書物を見て目を見開いた。
「ねえ、その手に持ってるの!　何?　それ?!」
「何って…、詩集だよ。さっきの星空の詩もここに載っている」
「ホント?!」
女の子は顔を輝かせてルウに近寄った。
「ちょうだい!!」
「えっ?!　それは駄目だ」
「どおして?」
「どうしてって、こっちが聞きたい。何で、お前にやらなきゃイケないんだ?」
「だって、あたし、その詩に音色を付けてあげられるんだよ。詩は音色に乗るのが一番嬉しいと思うの」
ルウは再び苦笑した。
「そうだな。お前の言うことも一理ある。しかし、この書物は私の物ではないんだ　あしからずだな」

「ぅ〜〜」
　女の子は諦めなかった。
「じゃあ、持ち主に会わせて！　直接お願いするから」
「そんなに欲しいのか？」
「当たり前じゃない！」
「……・・・・」

　ちょっと心が動いたが、この書物は母者の身体の一部だ。やはりくれてやる訳には行かない。
「すまないな」
　ルウは女の子の目の高さに屈んだ。
「持ち主は重い病気で伏せっている。お前に会っても話は出来ないよ。な、だったら書き写すか？　手伝ってやるよ」
「うう〜」
　女の子はもじもじと足を交差させた。
「あたし…、やっぱり、それが欲しい…」
「我が儘だな」
「だって、あたし、文字が読めないんだもの」
「はあ?!　だったら何で欲しいんだ？」
「その書物の文字が欲しいんじゃないの。その書物の光が欲しいの」
「ひ・か・り・・？」
「あんた、見えないの？　そんなに輝いているのに」
　＊＊＊
「ひ、光ってる？　これが…？」
　ルウはマジマジと手の書物を眺めた。古びた麻表紙の、角が丸まった書物…。これのどこが光って見えるんだろう？
「そう、世の中には、光る物、光らない物、あと、黒く陰をまとう物…の三種類があるんだよ」
「……」
「本当に見えないかなあ。あんた、あと三つも光る物持っているのに」
「えっ?!」
「その首のピンクの石と、腰の花模様の剣、それと右足首のアンクレット」
「……貰い物だ、みんな…」
「そうなの？　あんた、大事にされているんだね。そんなに一杯持ってるヒト、他にいないよ」
「・・お前・・お前、一体、誰だ・・・？」
　女の子は後ろ手を組んでクルリと回った。
「あたしはリリ。風露のリリ」
　前髪は淡い紫でざんばらだが、後ろ頭だけ水面みたいな群青

なのに、初めて気付いた。
「ね、いつでもいいから、その書物が要らなくなった時、あたしにちょうだい」
「あ…、ああ…。まあ、そんな時が来ればな…。あ、私は西風のルウシェルだ」
「うん、るう、るう、…るうーしぇる！」
女の子はルウの名前に節を付けてクルクル回った。首元で何かチラチラ光っている。
「あれ？」
リリは止まって自分の胸元を見た。首から下げた小さな袋が光って震えているのだ。
「何だ、自分も持っているじゃないか。光る物」
ルウは苦笑したが、リリは慌てた感じで言った。
「ううん、これはしんりぃからの合図だ！」
「えっ?!　シンリィ?」
「うん、…南の岩山の方へ行くって、分かれたんだけれど…。灰色の渦が現れたのかも！」
独り言のように呟いて、リリは砂丘の反対側へ駆けた。空中に水の波紋の丸窓が開いている。
「じゃあね」
ポンと飛び込んで、穴を塞ごうとした。
「わああ!!」
正面からルウの乗った粕鹿毛がドカドカと飛び込んで来て、リリは悲鳴を上げた。
「ダメだよ、ダメだよ、るう！　早く出て！」
「前に乗れ！　案内してくれ！」
「もう、るうったら…！　そんなにしんりぃに会いたいの？」
リリは呆れながら呪文を唱えて、ルウが広げてしまった波紋の大穴を閉じた。
「どうなっても知らないからね！」
リリを前に乗せて、馬はまとわり付く空気を裂いて走り抜けた。手綱を取るルウの所に、例の『意地悪なマボロシ』が来たのが、リリには分かった。だから、ダメって言ったのに…。
しかしルウは動じなかった。マボロシに何か言われているんだろうけれど、ただただ口を結んで前方を見据え、馬を駆っていた。

南の岩山の中腹の棚に、跳び蜥蜴の隠し部落があった。
岩と泥の武骨な住居が並んでいるのだが、中頃に一棟だけ石積みの頑丈な小屋があった。分厚い板の扉の前に、武器を携えた番人が座り込んでいる。真っ暗なその石牢で思案に暮れるのは、囚われの身の西風のソラ。

昨日の夜半、跳び蜥蜴の長老に会いに部落を訪れた。夜半なのは、彼らが夜行性だからだ。
そもそも跳び蜥蜴は横暴で残忍だ。だけれど、西風のソラの事は妙に気に入っていて、一目置いている。だから門外不出の隠し部落の場所を彼には明かして、訪問を受け入れていた。
しかし今回は違った。着いた瞬間、不穏な空気に気付く間もなく、槍を向けられ捕縛された。

「月が登ったな…」
岩室の隙間に明かりが滲んだ。
「夜が開けると蜥蜴達の行動が鈍る。何とかするなら、その時かな…」
しかし、夜明けを待たずして外で物音がし、仲の良い若い蜥蜴達がそおっと忍んで来た。
「西風のソラ、すまなかったな」
蜥蜴達はソラの手足の戒めを外しながら、事情を話してくれた。半月程前、狩りに出た屈強の蜥蜴数人が、形相を違(たが)えて戻って来た。そしていきなり、族長や側近の者を監禁し、砂漠の地を支配にかかると言い出した。迎合する者も多く、今、全体的に好戦的な空気だと言う。
「早く西風へ戻って結界を強化した方がいい。我等は貴方と刃を交えたくない」
「ありがとう、しかし僕が逃げ帰ると、戦の口火になってしまう。族長に目通りを」
「それは貴方が危険だ…、あっ!!」
薬入りの酒を飲まされて眠かけ漕いでいた見張りの蜥蜴が、頭を振って起き出して来た。若者達が大きな大人の上に折り重なって押さえた。
「今は逃げろ!」
外へ飛び出すと、別の若者がパロミノを連れ出してくれていた。乗馬してジャンプしながら、ソラは目まぐるしく考えた。
自分がこのまま逃げ帰れば、跳び蜥蜴の部族と完全に決別した事になる。即ち、西風の里が危険にさらされる。
「何とか、監禁されている族長に会って解放しなきゃ。あのヒトなら話が通じる。それにしても、何だっていきなり、こんな事になったんだ?」

「あぶな――い!!」
女の子の甲高い声がした。
ハッと気付くと、地上から飛んだ矢が脇をかすめ、怯えた馬が空中で横っ飛びした。
「しまっ…!」

鐙を踏み外して馬から身体が離れてしまった。

＊＊＊

風の妖精だって、得手不得手はある。得心術に長けたソラだが、急な風を呼ぶのは無理だった。

「ああ――――!!」

上の方でさっきの女の子の悲鳴。

「ソラ…」

何でルウ様の声が聞こえるんだろ?。

「ソラ、よかった、無事だった」

無事? 今凄く無事じゃない状況な気がするんだけれど。

――空が回る。地面の匂いが近付く――

次の瞬間、誰かの手が身体に回り、水の中みたいな無重力感に包まれた。遠い砂漠の夜の記憶を思い出しかけた途端、地面に転がった。あの高さから落ちたのに、衝撃はほとんどない。

慌てて身を起こそうと付いた掌の下で、ぐにゃりと柔らかい感触がした。

「ル、ルウ様!!」

「重い…、早くどけてくれ…」

「仲良しね!」

紫の髪を広げて、空からふうわり、リリが降りて来た。

「るうしぇる、怪我、大丈夫?」

「こんなのは怪我じゃない」

ルウは擦りむいた肘をソラの反対側へ隠した。

「ルウ様、何で来たんです? 今の蜥蜴の部落は危険です!」

「見りゃ分かる」

「僕は大丈夫ですから、安全な所まで退いていて下さい」

「全然大丈夫じゃないだろ!、今だって」

「ルウ様!」

「だから、様はやめろって!」

「じゃれ合いは後回しにして…、ほおら、来たわよ!」

リリの指さす上空を、二人も見上げた。星空に違和感のある巨大な渦巻きが、ゆっくり跳び蜥蜴の部落に近付いている。

「あれは、この間の…!!」

ソラとルウは息を飲んだ。

「乱暴モノの蜥蜴さんがあれに捕まったらトンデモナイ事になるって」

「トンでもないって…」

「あっちこっちに戦をしかけて、ケッキョク自分達も滅ぶんだって、じじさまが言ってた」

「……!!」

ルウが風のように立ち上がった。
「私が、行く!!」
粕鹿毛に跨がるや、剣に手を掛けながら渦に向かって躊躇なく飛び上がった。
「ルウ様!!」
慌てて追いかけようとするソラの肩を、後ろから誰かが掴んだ。群青色の長い髪の男性。
「貴方には貴方の役割があるでしょう?」
「お、お、大長様…!!」

「ルウシェルは自分の役割を果たしに行くのですよ。理屈抜きに西風の長としての本能で。さすがですね、ああいう所、モエギにそっくりです」
「大長様、でもまだ、あの方は未熟なんです！　一人じゃ無理です！」
ソラがすがるように言った。何でこのヒトが行ってくれないんだろう?
「無理ぃ?!」
大長の後ろで、紫の前髪の女の子が頓狂な声で叫んだ。
「あんなに光るモノに囲まれてるヒトが、無理ですって?!　そういう事言うから、出来なくなっちゃうのよ。信じてあげなくちゃ光が消えちゃって、出来る事も出来なくなっちゃうの！」
そう言いながら、真上の空間に開いた丸窓に手を掛けて振り向いた。
「南の岩山って聞いて、るうは真っ先にあんたの心配をしたんだね。あんたも、るうの光の一つなんだわ」
「えっ?!」
「あん、しんりぃ、待って、今行く！」
女の子は、吸い込まれるように丸窓に消えた。

渦は今や跳び蜥蜴の部落の上空一杯に広がり、部落内を混乱に陥れている。
蜥蜴達は手に手に弓矢を持って、不気味な渦に射かけているが、なんの手応えもない。かって経験した事のない恐怖に、恐れおののいて右往左往し出した。頼みの指導者たる知識豊富な族長は、監禁の身なのだ。
一人の蜥蜴が声を上げて空を指差した。皆が見上げる渦の中心に、碧緑の髪をなびかせた娘が、乗馬姿で浮かんでいる。
「あれは、西風の長娘だ！　さては奴らの仕業か?」
「違う！」
弓弦を引く蜥蜴達の前に、パロミノに乗ったソラが飛び込んで来た。

「太古から砂漠を守護する西風の長は、その役割に沿ってあの災厄を治めに行くのだ。信じて見守ってくれ。それがあの方の力になる」

言いながらソラは、自分に欠けていたモノに気付かされた。

ルウは迫り来る灰色の渦に向いて、白銀の剣を構えた。微動だにせず、強く、凛と。

彼女を支えてきた、彼女を信ずる心が、右足首と胸元でも輝いている。今、地上のソラも、その力の一つに加わった。

「思い出しますねぇ。貴方とシドが、初めて飛んで見せてくれた時…」

いつに間に、大長がソラの隣に来ていた。

「西風の者の才覚には驚かされっ放しですよ。あの小さな娘が、こんなにも強く真っ直ぐ成長してくれた。本当に、私達の歓びです。その歓びも、あの娘はエネルギーにして吸収して行くのですね」

「……」

ルウの唱えた破邪の力が空気を震わせた。上空に翡翠の光が広がり、渦がゆっくり反転して行くのが見える。

光が収まると、灰色はすっかり消えて、淡い朝焼けの空がすうっと広がった。

地上で待つソラの所へ、何だかいきなり大人っぽくなった西風の娘が降りて来た。

「破邪の光って綺麗だな…」

＊＊＊

跳び蜥蜴達は、西風の娘が部落を救ってくれたのを目の当たりにしていた。ソラと若者達が族長を解放するのを、邪魔立てする者はいなかった。謀反を扇動していた数人も、数日前、灰色の歪みに襲われていた事が判明した。族長は非礼を詫び、改めて絆を確認し合った。

蜥蜴達だって愚かではない。どうすれば、自分達が生き永らえられるか、ちゃんと考えていた。それに、砂漠の地にとっての西風の意味を、初めて認識しだした。

「私を覚えていますか？」

まだ興奮冷めやらぬルウに、大長は目を細めて近付いた。

「えと…？」

「私が西風を出たのは、まだ貴方が三つ位の時でしたからね。でも、生まれた時の祝福は私がしたんですよ」

「はあ…」

ルウはピンと来ない感じで目をパチパチした。

「見事な破邪でした。さすがカワセミの数少ない弟子の一人ですね」
　ルウは俯(うつむ)いた。
「そんな口幅ったいコト、言えない。情けない事ばっかりやって、お師さんにも愛想尽かされちゃったし…」
「そんな事ない！」
　いきなり丸窓が開いて、リリがビックリ箱のように上半身飛び出した。
「かわせみさんも、しんりぃも、いつもいつもるうのことばっかりで、腹立つ位だモン！」
「はいはい、私がリリを一番に考えていてあげますよ」
　大長はそう言ってリリの頭を撫でながら、ルウを振り向いた。
「カワセミが貴方の前に現れないのはねぇ、自分の問題ですよ。貴方のせいじゃない」
「…ホントか？」
「もっと自信をお持ちなさいな。師匠が貴方を信じているから、そのアンクレットは貴方の力になれるのですよ」
　大長は、ルウの額に優しく祝福してから、闘牙の馬に跨がって飛び立って行った。
　リリは丸窓に腰かけてルウを覗き込んだ。
「ね、るう、あたし、あんたの事、すごく好きになっちゃった」
「え?!　あ、ああ…ありがとう…。うん、私も、リリと…リリの唄が、好きだ」
「ホント?!」
「今度、あの書物の詩、全部にメロディーを付けてくれるか?」
「うん！　うん！」
　波紋の向こうにリリが去る時、丸窓の奥でシンリィがこちらを見ていた。一回り大きくなった白蓬の傍らで、ほんの少し背の伸びた少年が、昨日別れたばかりみたいな表情で、ルウをほんわか見つめていた。
　ルウには少し分かった。
　隣に来なくても、手を握らなくても、シンリィはちゃんとそこにいたんだ。今のシンリィは、こうやって渦と闘う事で、トモダチや大切な者達と、精一杯関わっているんだ。
　ちゃんと差し伸べてくれているんだ…。
　お師さんも…、きっとそうなんだ…。
　蜥蜴との折衝を終え、ソラより一足早く西風の里に戻ったルウは、部落全体の匂いが違うのに気付いた。胸騒ぎがして、宿屋の自宅へ急いだ。
「母者…?!」

モエギの臥せる部屋は重く沈んで昼間でも暗かったのに、今は一歩踏み込んだ途端、清々しい感じがした。
御簾を掛けた窓から漏れる月光に、半身起こす影がある。
「・・ルウシェル・・？」
「は・は・じゃ……!!」
ルウはモエギのやつれた肩に抱き付き、母は娘の髪を撫でた。
「背が伸びたな」
「うん…」
「すまなかったな…」
「ううん…」
「唄が、聞こえたんだ…」
ルウの髪を指ですきながら、モエギはポツポツ喋った。
「砂漠の星空の詩歌…。カワセミが、唄っていた…」
「そう…、こんな唄…？」
ルウは窓を開けて、軽い風を受けながら、さっきリリに教わった歌を口ずさんだ。
その時、遥か雲の上で、風が綺麗に流れたのだが、まだ気付く程でもなかった。

夜明けの砂漠の乾いた星空。
砂丘のてっぺんに水色の妖精が背中を丸めて座り込んでいる。
その後ろに立って、リリが水色の髪を弄(いじ)くっている。
「言われた通り、砂漠でるうしぇるとお喋りしてたの。そしたら、しんりぃに呼ばれて、渦巻き一個退治してて、遅くなっちゃった」
「ああ、ご苦労だったな。だけど髪を弄くるのはやめてくれ」
カワセミは疲れた感じでぐったりして、まとわり付くリリに抵抗する元気もない。
「くれるかな？　あの書物」
「あの書物の光は、詩歌の作者がモエギにあげたかった心だ。関係ない者にとっては、ただの器でしかない」
「そうなの？」
「物は、所詮、物だ。リリが貰っても、光り続けるとは限らないぞ」
難しい治癒の術を使ってヘロヘロの筈なのに、色んな事をキチンと教えてくれるカワセミが、リリは好きだった。
「るうしぇるのお母さんを治療に行くのなら、内緒でコソコソしなくてもよかったんじゃないの？」
「よくない…」
「…？？」
「回復するのはあくまでモエギの力。ボクはちょっと障害物を取り除いてやる程度なんだ。でも、見た目には、ボクが万能の

力を持っていて、何でも治せるように映っちまう…」
「…るうしぇるも、そう思っちゃうの？」
「……ああ、多分……」
「ふうん……」
カワセミは抱えた膝に顔を埋め、リリは十本目の三つ編みを編み終えた。
「かーたんなんて、ヘタレ坊主なのにね」
「ああ…、ヘタレ坊主だ…」

～飛翔～

秋の初め、三峰の岩尾根。
雨上がりの色付き始めた岩ツツジの道を行く、二騎の姿があった。馬も乗り手も、ホコリと垢まみれのボロボロ。
しかし、眼だけは反比例して、旅をやり遂げた自信に生き生きと輝いている。
「ふぃ～、やっと三峰だね、ヤン」
「地上を行ったら、ハンパなく遠かったんだな、フウヤ」
「よく僕達、最初、西風の里まで歩いて行こうと思ったよね」
「知らないって怖いな」
二人は肩を竦（すく）めて笑い合った。
「もうすぐ、帰っちゃうね…」
「うん……」
懐かしい我が家に帰れる筈なのに、二人の足取りは重かった。長い旅が終わるのが寂しいのは、世の常。
それに、勝手した事への後ろめたさ。大人達に怒られるだろうし、罰も待っているだろう。
「何て言って帰ろ」
「出来れば、初っぱなにイフルートに出くわしたいな。あのヒトなら物分かりがいいし」
ムシのいい事を言いながら、二人は部落へ降りて行く道に掛かった。
「……」
ヤンが立ち止まって首を傾げた。
「どしたの？　やっぱ、帰るの、明日にする？」
「ううん、…何だか、変だと思わないか？」
「何が？」
「狩りをしていなかった」
「今日は、もう終わったんじゃない？」
「それに、山の中で一回も鹿を見なかった。姿も、気配も」
「…そういえば…」

「鹿だけじゃなく、狸やイタチや、小さい鳥も、一匹も見なかったと思わないか？」
「……」
二人は微妙な不安を感じながら部落に向かったが、近付くに連れ、賑やかなざわめきが聞こえてホッとした。男達が狩りから戻って、獲物を分配している声だ。
「取り越し苦労だよ、ヤン」
フウヤは馬を小走りさせて角を曲がった。
「…!!」
「どうした？　フウヤ」
後に続いたヤンも、びっくりして馬を止めた。
確かに、男達が狩りから戻り、女達が出迎えて、獲物を解体しているいつもの風景だ。だけど、獲物の数が尋常じゃない。
ひと群れ分の鹿、イタチ、子供の兎まで…、いつもの狩りの何ヶ月分もの動物が所狭しと並べられ、広場は血の臭いに充ちていた。
「な、なに、これ？」
二人は馬を降りて立ち尽くした。
「よぉ！」
背後から突然肩を掴まれた。
「帰って来たのか、丁度よかった」
ヤンの望み通りの、鷲羽のイフルートだ。
「イフルート、あの、勝手してごめんなさい…」
「うん、構わん構わん。お前達が帰って来たのなら、更に狩りの効率が上がる。明日からより多くの獲物を捕る事が出来る」
「えっ……？」
こんなに獲物があるのに、まだ捕ろうっていうの？　フウヤも聞き間違いかと思った。
「獲物を沢山必要な、特別な行事でもあるの？」
「いつだって必要だろ。毛皮や干し肉、角に油…、皆、麓の市で高く売れる」
「……」
「多くの金貨を得られる。ほら、見てくれ。族長の家は新しく建て替えの最中だ」
里の奥の族長の住居は白木の柱が立ち、一回り大きく拡張されていた。
「……」
限られた土地の中で、何でわざわざそんな事しちゃうんだ？家は広くなるけれど、皆の広場は狭くなる。
「おう、今行く！　じゃあな!!」
イフルートは呼ばれて皆の中心へ戻って行った。
二人は胸騒ぎを感じながら、馬を曳いて、広場は避けて裏道

を通って厩へ向かった。

「ヤン！　フウヤ！」

厩にヤンの母親が飛び込んで来た。

「心配したのよ。よく帰ってくれたわ」

二人は何となくホッとして彼女を見たが、すぐ違和感に眉をひそめた。

いつもは地味だけれど小綺麗にしているのに、今日は余分な装飾品をゴテゴテと身に付けて、かえってだらしない。そういえば、広場にいた村人達もそんな印象だった。質素で静かな三峰の民でなく、麓の市で金貨のやり取りをしている忙(せわ)しない商人達みたいだった。

「えっと…、母さん…？」

「さあ、鞍を降ろして水をやったら、早く家へ戻って。早く！」

「でも、馬の世話を…」

「いいから！」

馬の労いもそこそこに、母親に引っ張られるように自宅に引き入れられた。二人が入ると、母親は入り口の掛け金をカチリと掛けた。以前は無かった物だ

「そんなの付けたの？」

「そうよ、物を持つと盗られるから、守らなきゃ」

「盗るヒトなんていないでしょう？」

「いるわよ！」

母親は頑なに言い、フウヤの方を向いて、甘ったるい声を出した。

「フウヤ、おお、フウヤ。貴方はうちの子よ。欲しがるヒトが多いけれど、うちが最初に取ったんだからね」

「？？　おばさん？」

「うちの息子が拾って来た子供が狩りの名手だった。私は運がいいわ。ティコやビィを亡くした哀しみを堪えて我慢して来たのを神サマは見ていてくれた。ちゃんと、代わりの子供をくれたわ、ねぇ…」

「…えっ？」

「母さん?!」

…確かに、母さんだけれど…？　何かおかしい。

母さんがこういう風に思っていたのは、うっすら分かっていた。でも、面と向かって朗らかに言う事じゃないだろ?!

「フウヤ!!」

白い子供は真っ青な顔をして、後退りで戸口の掛け金を開けて、外へ飛び出してしまった。

「どこへ行くのぉ。他所のヒトと話しちゃ駄目よ」
母の声を背にしてヤンは追い掛けた。厩に向かって走るフウヤに追い付いて、肩を掴んで引き止めた。
「フウヤ、マトモに受け取るなよ。部落全体がおかしい」
「分かってる…」
いつも快活なフウヤが、口の中でごにょごにょ喋った。
「でも、全くのデタラメじゃない…」

「おお、フウヤ!!」
曲がり角に顔見知りの村人がいた。
「話があるんだ。どうだ、うちの子にならないか？　うちに来たら跡取りだ。毎日肉を食わせてやる」
「い、いいよ…！」
フウヤは駆け出した。ヤンも着いて走った。大人達はいつの間にか人数を増やして追い掛けて来る。
「もう！　いい加減にして！」
角を曲がった所で、足元に糸玉が転がって来た。
「…!!」
糸の伸びている窓から、三つ編みの婦人が手招きしている。迷っている余裕はなく、二人は窓を飛び越えて臥せた。
婦人は窓を閉めた。直後、眼の色を変えた何人かが窓の外を駆け抜けて行った。

＊＊＊

「もう大丈夫ですよ」
女性の声で、二人はベッドの下から這い出した。
「ありがとう…あの…」
「どういたしまして。えと、貴方は、マァサの所の、生き残った上の子ね。ヤン…でしたっけ？」
マァサというのは、ヤンの母親の名前だ。
「はい」
「それと、貴方は…ヤンのお友達の…フウヤ。いつかは参(しん)を有り難うね」
「…あ、いえ…」
フウヤは戸惑った。てっきりまたカペラと間違われると思ったんだけれど？
「何かイタズラでもしたの？」
「ううん…」
このおばさんもおかしくなっちゃってるんだろうか？　でも、他のヒトに比べて目の焦点が合っている気がする。
「ね、おばさん、最近、変わった事なかった？　例えば、空が水みたいに歪んだとか」
女性は、呑気な感じで小首を傾げた。

「ああ、そういえば…。あれは不思議だったわ…」
女性の話では、十日程前、空が灰色に渦巻いて、部落全体を覆った。びっくりしたけれど、特に何の被害も出なかった。だけれどその後、村の雰囲気が変わったというのだ。
「灰色の渦巻き…」
「おばさん、平気だったの？　何か、恐ろしいモノに会わなかった？」
「…んん、ああ、『鏡の中の自分』みたいなヒトに会ったわ。けど、恐ろしくはなかったわよ」
「え…？」
「だって、そのヒト、ずうっと泣いていたの。カペラがいない、会いたい、会いたい、会いたい…って。見ていてこっちも切なくなって、あんまり可哀想で、ずっと慰めてあげていたの」。
「慰めて…」
「そう、そしたら何だかこちらの心もすっきりして、そのヒト、消えてしまったの」
「……」
女性は、ベッドの脇のカゴから編みかけのセーターを取り出した。
「そうそう、フウヤ、丁度よかった。肩幅を合わさせて頂戴」
「えっ？」
「これ、貴方のなのよ。三峰の冬は底冷えするからね」
「あっ…えっと…」
フウヤはマジマジと女性の顔を見た。
「それ…カペラのじゃなかった？」
「ええ、カペラのよ」
「……」
「だってフウヤはカペラだもの」
ああ、やっぱり、おばさんの心の病気は、治った訳じゃなかったか…。ちょっと明るい気分になりかけていたフウヤは、ガックリ肩を落とした。
「ヤンのお母さんは、僕をティコやビィの代わりだって言うよ！　でも、僕はフウヤなの！」
いつもは受け流すのに、ヤンの母親の事で苛ついていたフウヤは、つい反発してしまった。
「そうね…」
「…?!」
「でも、私の心の奥だけでは、カペラが貴方に宿って帰って来たと思っていたいの。マァサにとっては、ティコやビィなの。そう思うだけで、どれだけ心が救われるか。だからね、フウヤ、貴方、マァサを許してあげてね」

「……」
「村の皆も許してあげてね…」
「……」

少年二人は部落の広場に立った。
周囲の大人に色々言い寄って来る暇を与えず、早足で一直線にイフルートの前へ歩いた。
「おお、どうした？　そうだ、フウヤ、早く正式に三峰の民になれ。この部落はもっと裕福に、もっと発展するぞ。そうしたら、俺はまた旅に出るんだ。悠々自適に。お前らも行くか？」
「…イフルート…」
「この間までの部落だったら、フウヤは喜んで三峰の民になっていたよ。イフルート、お願い…、貴方ならちゃんと心が残っている筈だ」
「何を言っているんだ？」
「思い直して。山への感謝はどうしたの？　このまま山の動物を狩り尽くしたらどうなるか…」
「ヤン、大丈夫だ。獲物がいなくなったら、三峰の向こうの山に行けばよい」
「向こうの山って…、別の部落の縄張りじゃないか」
「奪えばいいだろう」
「…!!」
「…う…ば…う…」
顔色をなくす二人の周りを、狩猟姿のままの男達が囲んだ。
「さすがは見聞広いイフルート隊長だ。『取り尽くしても、足りなくなったら奪えばいい』…こんな簡単な事、何で今まで思い至らなかったんだろう」
「貴方達が『それはイケナイ』って心をちゃんと持っていたからだよ！」
「何でそんな心を持っていたかの方が不思議だ。我々には奪う力があるというのに」
「イフルート!!」
「狩りにしても、戦にしても、お前には働いて貰わねば、ヤン。フウヤ、お前はどうする？　正式に三峰の一員になるか？　まあ、拒めないがな」
男達は包囲を縮めた。

「うん、いいよ…」
フウヤは、水の底にいるみたいにシンと言った。
「フウヤ？」
「僕、三峰が好きだ。だから、皆の役に立ちたい」
「…？？…」

驚いたヤンだが、スッと握って来たフウヤの手の力に、口出しを止めて黙った。
「いい子だ、フウヤ…」
大人達は包囲を解いて、二人の肩を叩いた。
＊＊＊
それから何日か、二人はただ黙々と大人達の言う事に従った。
朝から晩まで狩りに出たが、もう三峰の山に獲物は少なかった。そして、踏み込んだ隣の山にも、その向こうの山にも獲物はいなかった。
「灰色の渦巻きに覆われたのは三峰だけじゃなかったんだね」
夜の厩で飼いをつけながら、ヤンがフウヤに話し掛けた。
「うん……」
フウヤはあれ以来言葉少なだ。ヤンを避けはしないけれど、本心を言わない。
「大長さんやカワセミさんはどうしているんだろう？」
「そうだね…、あのヒト達が見落とすか、手が回らない程、灰色の渦巻きがあちこちに出現しているとしたら？」
ヤンは空恐ろしくなった。
灰色の渦巻きに喰われても、三峰の部落みたいに、一見変わりないのだ。もしかして世の中で急に戦が起こる時も、心を蝕む恐ろしいモノが、そこいらを徘徊しているのかもしれない。
「おい、とっとと済ませろ」
厩の入り口で男が言った。部落の者達は、まだ二人が逃げ出さないか用心していて、馬に乗るのを禁じ、二人きりで馬の世話をする時は見張りが付いた。
フウヤは文句も言わず、逆にヤンから離れて糸玉婦人の所に入り浸っていた。婦人の体調は目に見えてよくなって、腕が細長いフウヤの体型ピッタリにセーターを編み上げつつあった。
その朝の狩りでは、珍しく鹿の群れを見付けた。
一番高見に立ったヤンは、ちょっとずらして指笛を鳴らした。もしかして、もうこの辺りの最後の鹿のコロニーかもしれない。
尾根の上方で、木に登って待機していたフウヤが、小さく手を振るのが見えた。彼も最後の鹿を捕り尽くすつもりはないのだろう。
その瞬間。
――ヒュン！　ヒュン！――
向かいの斜面から弓が射掛けられた。
灌木の下から一斉に、赤い隈取り化粧の男達が現れた。
「…!!　向こうの山の狩猟部族だ!!」
岩陰に伏せながら、ヤンは心臓がバクバクした。自分達は、

他所の部落の領地を犯し続けていた。向こうも三峰の土地を狙っている。
いつもの狩猟と違う。ヒトとヒトが憎しみ合って争う、戦が始まってしまったんだ。
「ヤン――――!!」
下で仲間の声がした。
「敵の場所を教えろ!!」
「て、敵って…」
背中が水を被ったように冷たくなった。いつの間に、自分達に敵が出来たんだろう?!
谷を右往左往する男達の殺気立った気配。バラバラと飛び交う石弓の音。本当の戦…本当の殺し合い…。
「駄目だ!!」
ヤンは震える足を拳で叩いて、岩を飛び降りて走った。
「イフルート!! 話し合いを!!」
今からじゃ遅いかもしれない。
でも、止めなきゃ! やっぱり止めなきゃ!!
「…??」
不意に、谷がシンと静かになった。
「イフルート…? みんな……?」
最後に皆の気配の集まった谷の底の方を目指して、ヤンは喉をカラカラにしながら走った。
藪を抜けると三峰の男達が茫然と立ち尽くしていた。皆、雷に打たれたように目を見開いて、石弓をぶら下げて放心状態だ。
向かいの谷の斜面に、赤い隈取りの男達が三々五々突っ立っている。彼らも同じように茫然としている。
双方の真ん中に小さい川があり、ヤチブキの茂みの中にイフルートがしゃがんでいた。正面に赤い隈取りの一際派手な男が、同じ場所を見つめながら、やはり屈み込んでいた。
ヤンは胸をザワつかせながらそこに近付いた。
心臓が凍り付いた。
悪い夢を見ているようだった。
川の流れに赤い筋を作って、白い猫毛の少年が、目を閉じて横たわっていた。矢は抜かれていたが、一体何ヵ所刺さったのか、考えたくもない。
「我々が、今まさに闘おうとした時、上から飛び降りて来たんだ…」
「馬鹿……何だって、そんな、所に…」
ヤンが歯をカタカタ言わせて呟くのに、赤い隈取りの男が答えた。

「逃げる時間はたっぷりあったと思う。我々は、この子供はすぐに逃げると思って弓を引いたのだ」
「……」
「両手を広げて、何も言わず、立ち塞がったんだ。最初の弓が身体に刺さっても、まだそのまま立っていた」
イフルートは半身を血の川に浸した少年を抱き上げた。
皆の中にちょっとでも残っていた本当の心を、その身を使ってかき集めたんだ…。
「・・・フ・ウ・・ヤ・・・」
「この子供は三峰の者か?」
隈取りの男がシンとした声で聞いた。
「生まれは別だが、我が部族に迎えた所だった」
「天よりの授かり物だったやもしれぬな」

「フウヤは普通の子供だよ!」
ヤンはイフルートの腕からフウヤの身を引ったくった。
「特別な能力を持っている訳でも、選ばれた血統な訳でもない。ただ、この世で一番大事で難しい事を、一生懸命やろうとしただけだ!!」
ずぶ濡れの身体を抱き締めて、ヤンは目を見開いた。
「心臓が、動いてる…!!」

「何だって!」
「本当か!」
「でも微かだ。ねえ、助けて! フウヤを助けて!!」
周囲に立ち尽くしていた男達が動いた。
血止めを持っている者はいるか・・? 動かすな、ここで手当てしよう・・湯を沸かせ・・火をおこすんだ・・
皆、部族に関係なく協力し合った。
双方の持ち寄った薬草に囲まれ、包帯でぐるぐる巻きのフウヤが呼吸(いき)を取り戻したのを見計らって、赤い隈取りの男達はその場を去った。
「やはりその子供は天からの授かりモノだ。命の糧や水や空気のように。大切にしろよ」
「ああ・・」

ヤンは黙っていた。
フウヤは自分のやるべき事を心得ていた。
では、自分は……?

〜Vへ〜